

## 俳句勉強

山口青邨

私「これから俳句を勉強したいと思ひますが、どうすればよいのですか」と、時々訊かれる。

かういふことを訊く人にもいろいろあつて、俳句といふものを全く知らない人もあれば、ひそかに研究してゐて、かなりわかつてゐる人もある。だから、さう訊かれてもその人によつて、いろいろの答があると思ふ、然しとにかく、さうまで言つて来る人は俳句に興味をもつて来てゐるのであつて、自分も作つて見度い、一通りのことを身につけたいと願う熱心をもつてゐる。だからそれかひやかしないでない限り私はその人の請をいれてゐる。

「先づ作つて見ることです」と私は答へる、さうすると「それではどうして作るのですか」と訊いてくる。そこで私はその人の俳句に對する豫備知識の程度によつて、俳句作法の手ほどきをするといふ順序である。

この手ほどきといふことは容易なやうで實は容易ではない。俳句は十七字から成立つてゐる、五・七・五といふ節から成立つてゐる、季題といふものを必ず入れなければならぬ、——春ならば、鶯とか、櫻とか、蝶とかいふものを一句の中に入れる。俳句は詩であることを忘れてはいけない。教訓だとか、哲學だとか、人生觀だとかを裏にひそませるなどといふことは邪道である。それでは詩でない、文學ではない、尤も自然にその作品から、その人の人格なり心なりを反映して、影響を受けるといふことはあるのであるが、初めからさういふ意圖をもつてゐるのではない、初めからさういふ道德的觀念を織り込まうとすることはいけない、自分の感動をそのまま十七字に表はすのである、この櫻はうつくしい——と思つたら、そのまま詠へばよい、今日は寒いと感じたら、それを率直に表現すればよい。

俳句は詩であるから、本来ならば聲を出して朗唱すべきである。朗唱した時に、よい氣持でなければならぬ、それには調子といふものか調つてゐなければならぬ、五・七・五調とするのもその爲めである、元來日本人には、この五・七・五の調子は呼吸にあふのであつて、むかしから使はれて来た。

かうした上に更に嫌な言葉とか、悪い語呂とか、互の文字の間のつながりの不圓滑とか、不愉快な響を與へるものとか——さういふことも句の調べといふことから言へば大切なことで、よく吟味しなければならぬ。——こんなことを私は話をする、そして「まア作つて御覽なさい」と、すすめるのである。その上で又、ほかに句作上に於けるいろいろの準備や心構や勉強法を話すのである。

山口青邨著『俳句入門』より一部抜粋